

編集委員 インタビュー

神戸女学院大音楽学部准教授、ピアニスト 崎谷 明弘さん(37)に聞く

アジア系の存在感が増すコンクールをどう見ますか？



西宮市、神戸女学院大

クラシック音楽の著名な国際コンクールでアジア系演奏家の存在感が増している。本選に進んだり、上位に入賞したりする演奏家の数が圧倒的に増えた。クラシック音楽の伝統の中で育った西洋人にとって、文化が異なる東洋人が評価されるのは喜ばしい。一方で東洋人は、西洋人にはない「自由」な演奏が期待できそうなのに、入賞を目指すことでかえって魅力が損なわれないか、気になったりしない。若い演奏家はコンクールにどう向き合い、音楽ファンはどう接すればいいのか。コンクールについての研究で知られ、ピアノの演奏家でもある神戸女学院大音楽学部准教授の崎谷明弘さん(37)に話を聞いた。

(吉本貴司)

昨年秋、シオバン国際ピアノコンクールで薬原志織さんが4位に入賞した。本選でのアジア系演奏家の多さと、西洋人の少なさに驚きだ。

「そもそも、クラシック音楽を勉強して、国際コンクールの場に出てくるヨーロッパの人が非常に多いという現実があります。15年くらい前、私の通っていたフランスのバリ音楽院もやはり東洋人の割合は非常に多かった。東洋、特に日本はコンクールがたくさんあるため、ピアノ指導者の需要があり、音楽に関係する仕事も多い。小さい頃から習いこの延長線上にコンクールがあつて、みんな競って入賞を目指します。賞レースが好きな国民性もあります。音楽を職業として、仕事としてやるのか、出口が見えやすい面があります。韓国もちょっと前まではめちゃくちゃ(コンクールに)強かったですね。今、音楽教育に力を入れていいると思うのは、中国です。天津に音楽学校ができて英才教育が行われていて、大学(音楽院)に入る前の年齢の子どもを教える課程が設置されています」

「印象論ですが、ヨーロッパ出身者の多くは『別にコンクールで入賞しなくても』というところがあると思います。コンクールがあまり好きじゃないというのもあるかもしれません。(演奏という)目に見えないものの、割り切れないものをどこかで受け入れるか、コンクールで入賞しているかどうかとは関係ないものに対する理解ですね。それが根本的にわかれれば違うんじゃないか。(ドイツやフランス、イタリアなど)音楽の伝統国の人々が、レベルの高いところを目指していくということが少なからずあると思います」

東京芸大の博士論文では、21世紀のピアノコンクールの日本出場者をテーマにされていますね。

「修士論文は国際ピアノコンクールの成り立ちと変遷についてです」

入賞や経歴、職業に直結／その先の音楽家の人生、応援を

自分も現役のコンテストアンソロコンクール参加者でやってましたし、やっぱり精神的にすごく苦しかったです。でも、目標があつて分かりやすかった。コンクールがあつたから音楽も続けられたんですね。両方の側面があつて、コンクールを受けている人たちが、もう少し楽に臨めるようになればと思つて書きました。私のように音楽一家じゃないところから出てきた人が音楽で身を立っていかなくては、やはりコンクールはすごく大事なツールです」

「仕事に就かないといけないので、何かの役に立つなと思って学位を取ったのですが、今になって、すごく音楽を勉強したいと思つています。今まではキャリア(経歴)のために勉強してきましたが、そうではないところで、しっかり音楽を勉強し直す必要があると感じています。また若手の皆さんには、コンクールに夢を持ちすぎないように、と願っています」

コンクール入賞に照準を合わせることで、演奏の多様性が失われるのではないかと心配になることがあります。

「コンクールの一番の弊害は(いい)経歴を持つて出ていくからその人はいい演奏家、というふうな先入観を与えることです。経歴は大きな武器にはなりますが、それがグローバル化していないか、ずっとその実力を維持しているか。私も自戒しているところです」

「(演奏家で)よめるのは、ミスがあつたらずと悪い点がつくんじゃないかと、音楽全体や作曲家の意図まで制限してしまうようなそういう取り組み方はしない方がいい。音楽と向き合う時は、コンクールに使われてはいけません。本当は、いい音楽をやりたいというところの延長線上にコンクールの入賞があるべきなんです。もう一つ、コンクールで課題曲を選ぶときに、例えばベートーベンのソナタ32曲からどれを演奏するかというときに、審査員の好き嫌いが分かれそうなる曲を選ぶ、解釈の差が少ないう曲を選ぶ、点数が高くなる曲を選ぶ、ということがあります。嫌な話ですが、点数が高くなる曲と選んでいて曲を選ぶというのは、選曲の部分ですごくゆがめられていると思います。人々を感動させるように弾くには、どんな曲だって難しいし、曲によつて難しさは違うはず」

崎谷さんはこれまでどんなコンクールに挑戦してきましたか。

「高校を卒業してすぐにチャイコフスキー・コンクールを受けました。20代の頃はシオバンが好になれたため、シオバン・コンクールは申し込んでいません。日本は世界三大コンクール(ポーランドのシオバン、ロシアのチャイコフスキー、ベルギーのエリザベト王后)なく、報道されるコンクールが固定化してしまつていますが、僕はそうだと考えるよりも、日本にはあまり知られていないスペインやイタリアのコンクールで入賞してきました。昔、コンクールに演奏動画を提出してもう少し聴かれないことがありましたが、(ヨーロッパの)両方の人たちは僕の5分の演奏を喜んでくれます。自分の音楽を受け入れてもらえる場所というのは、必ずしも、目指しているところにあるとは限りません。コンクールで入賞を取らなくてもいいと思います」

コンクールで入賞できなかった人の演奏が劣っているとは思えません。音楽ファンはどう接すればいいでしょうか。

「今は、ユーチューブからデビューされる演奏家もいます。社会全体に『音楽って、こんなに面白いものなんだ』というのがある。アカデミア(専門教育機関)出身ではない人たちがたくさん出てきているのはいいことだと思います。どの演奏家も聴くかを選ばない時代です。コンクールも絶対聴かれないっていいんじゃないでしょうか」

「聴きどころだけとか、動画を2倍速で、あるいはスクリップして早送りして、音楽を聴くような時代は、ピアノの演奏会ですごく退屈なことです。でも、私たちはその退屈が好きだから行くわけです。私はクラシック音楽をやっているので、作曲家の書いたこととはリスペクトしてほしいし、アカデミア出身者が伝統をなすべき役割を担うのは、大事なところだと思つています。コンクールの主催する方も聴く方も、その音楽家の人生を応援していくことが必要になるのかもしれないですね。コンクールのその先が大事ですか」

さきや・あきひろ 1988年神戸市出身。県立西宮高校音楽科卒業後、パリ国立高等音楽院、東京芸術大学大学院で学。国際ピアノコンクールについて研究し、博士号(音楽)を取得。